

大草谷津田いきのものの里 自然観察会

大草谷津田 大探検！

佐野由輝（大網白里市）

日時：2014年1月19日（日）10：30～12：00 天候：晴れ

参加者：13名（大人12名）

担当指導員：佐野由輝、山岸文子

今回は、大草谷津田生きものの里が保全されている大草地区の伝統行事と文化に触れ、理解を深めることを目的に観察会を実施しました。そのため、いつもと違うコースを歩きました。まずは、駐車場のそばに鎮座し、道歩く人の安全を見守っている馬頭観音を観察しました。馬頭観音には、安永四年と刻字されていることから、西暦1775年から200年以上の長きにわたって、地域住民に大切にされてきたことがうかがえます。この日も、地域の人の手によるものと思われる花が飾られていました。

続いて、町中を通り抜けて、八幡神社に向かいました。3年前の東日本大震災の際に倒壊した鳥居跡を抜けると、きれいに整備された参道が続き、参道の両側はスギを中心とした鎮守の森が整備されていました。しばらく参道を歩くと、社が見えてきました。1月19日は、今年の稲の豊作を願う祭の日で、正午からおびしゃの神事が行われるとのこと。竹で作られた弓と矢、的には一月から十二月までの文字が書かれています。射手が放つ矢が的のどこに当たるかによって稲の作柄を占います。矢は24本用意されており、希望すれば見学者も矢を放つことができるとのことです。観察会が終わった後、午後の祭を見学し、実際におびしゃにチャレンジした指導員もいました。さて、その結果はどうだったのでしょうか。

伝統行事がいつまでも残ることを祈りつつ、炭焼きの跡に移動しました。戦後、まだ燃料として薪炭材が使われていた時期に、炭焼き窯を築き、周囲の雑木林を伐採した木を炭材としていましたが、燃料革命で石油やガスが普及するようになり、その役割を終えました。里山の景観は、定期的な伐採と利用が繰り返される中で、維持されてきたことを説明しました。よく見ると、炭焼き跡の回りにはウサギの糞が。里山は野生動物のすみかでもあるのです。

東邦大学の学生たちが、アカガエルの産卵場所を確保するために、田んぼの中に穴を掘る作業をしている様子を見ながら、最後に、何体もの馬頭観音が並んでいる、道の分岐点に移動しました。移動や荷運びの手段として使われた馬が、道の途中で死んでしまった時に馬頭観音が祀られることが多いことを話し、この辺が往来の要所であり、難所であったことを想像しました。

今、我々が自然観察会を通じて、大草谷津田のすばらしい自然に触れることができるのは、その自然を大切に守り、管理してきた地域の人々のおかげであることを再確認しました。大草の自然がいつまでも残るためにも、大草の文化と伝統も維持して欲しいものです。